

『道標』は全文一万三千余字の長文のため、本文の一部を  
割愛して(中略)とし、一部語句を加除して転載しました。

## 道 標

父の七回忌が近くなった。かねてから思っていた追憶の記をこのしおに書いておきたいと思う。父との思い出はそのほとんどが私の幼年時代につながる。父は私が小学校五年生の折り、病を得て床に伏した。発病から死にいたるまでの父について憶えていることといえば極めてわずかだから、本当の意味での思い出といえばそれ以前にさかのぼる。

明治三五年三月、父は里吉喜次郎の長男として生まれた。母の名は力子(カネ)。

明治維新からわずか三五年、父が生まれた当時の日本は日清戦争、それに続く日露戦争の戦費支出のために、国家財政は逼迫の極みにあった。当然、庶民の生活も極度の困窮に陥っていた。

父の幼い頃は体も細く虚弱であつたらしく、たびたび発熱する私のひ弱い体を案じながら、

「わしの小さい頃とそっくりじゃ。やっぱり血筋かのお」と、枕もとにたたずんで溜息まじりに嘆いていた。

父の父親、すなわち私の祖父は妻と三人の幼児を残して、早くこの世を去った。一家の柱を失った祖母はまだ幼ない父を親戚に預け、二人の幼児を抱えてその日から身を粉にして働いた。この頃の祖母のことを父から聞いたことは幾度もある。しかしそれはいつもこまねずみのように働く母の姿であつて、我が子を慈しみ育てる母親ではなかった。父は十三歳になって始めて母のもとに帰されたという。

幼きにして一家の戸主となつた父は、早くから世間の風に触れ、二人の幼い弟をその瘦身に背負つて、戦争の続く明治から大正の時代をくぐりぬけた。

父の同世代の者たちはただ学業に専念するだけであつたのに、父は義務教育を終えるか終えないかで桐箱屋に奉公した。わずかに支給される給料も自分の小遣いにするではなく、そのすべてを家の生活費に充てた。

父から聞かされた当時の思い出話に、私の忘れることの出来ない貴重な話がある。

ある冬の夜のこと。桐箱屋の仕事も終り、数人の職人たちは三々五々家路についた。折から雪も降り始め、父と三、四人の同輩達は仕事場の後仕舞も終えて夜も更けたためかるみ道を家へと急いでいた。ある角を曲がったとき、うどん

屋の屋台のちようちゃんが目に入った。腹は空くし、雪は間断なく肩に積もる。暖かそうな湯気の立ち上る屋台は、雪に震える彼らにとって何物にも増した魅力であったろう。同輩たちは当然のことのように皆を促し、屋台に誘った……。父は一人で無言で家路をたどった。

どんなにあの暖かいうどんの湯気に包まれたかったかかもしれない。どんなに皆と仕事のあとの無駄話があったかたかたかたかたかたかたかたかたかたかたかたにさえも、自分の恣意を通すことは出来なかったという。同輩たちが談笑しながら、屋台の椅子に腰かけるのを後ろ目で見ながら、父は何を思い、何を考えたらう。

私はこの話を父から何度も聞かされたが、美談として聞かされたことはただの一度もなかった。父はこのような思い出話をしながら、

「あの頃のわしといえは、ただ自分をおさえることだけだったかもしれん。自分が憐れとも、みじめとも思わなかった。義務感からではなしに、ただそうしなければならなかった……。こんな話をお前に理解させるには、あまりにも時代と世相が変わり過ぎた……」

ただ淡々と、こう私に語るだけであった。

私にはそれが幸せ過ぎる私の今の境遇を暗に指摘するような声に聞こえるのである。自分に甘えることの出来る者は、自分のおかれた境遇に幸福を感じることに鈍感になっているのかもしれない。安穩無事のうちに時は進んでいき、己の幸せを忘れていってしまうのではないか。

淡々とした父の青年時代の思い出話は、私にこのことを違った言葉で暗示したのかもしれない。

二十歳に満たないうちに父は独立して、桐箱を造る会社を興した。会社と呼ぶにはあまりにもちっぽけな店だったというが、とにかく数年の労苦が実って人の上に立つ一城の主になった。

それから四年後、母を娶り、様々な艱難の待つ戦時の社会へ飛び込んでいった。戦前、戦中を通しての父にまつわる逸話を逐一書くと際限がない。というよりはむしろ、当時の父の苦勞の有様を的確に書き表すことは、おぼつかない私の筆では到底不可能としか思えない。

昭和十二年、父母に初めての子供が誕生した。長女、啓子である。産声も聞き取れないほどその誕生は弱々しかったが、両親の手厚い保護のもとで啓子はかろつじて生育していった。会者定離のことわりのとおり、昭和十三年には父の唯一の親である母親が老後の安楽を味わうこともなく、ひっそりと死んでいった。

「ただ働くためだけに、この世に生まれてきた」

祖母について父はこういう意味の言葉を何度か口にした。悲喜こもこもものドラマはまだ続く。

昭和十四年には次女淳子が生まれた。男子出生を秘かに期待していた父は、安

産の喜びの陰で期待はずれの色を露骨に表した。昭和十六年一月、男児が誕生した。男の子を待ちわびた父は飛びあがりばかりに喜び、隣近所に

「男の子が生まれた、男が生まれた。男のしるしがついとるっ」と、ふれまわった。孝則と名付けた。

しかし、父の喜びも束の間、孝則は二歳で夭死したのである。もともと虚弱だった幼児の体はたびたび消化不良をひき起こし、日に日に増えていくはずの体重は容易に増えることがなかった。ある時、不消化物を口にしたら孝則は当然のことのように激しい下痢を起こし始めた。父と母は医者を呼ぶほか為すべがなく、父にいたっては病児の枕もとでただオロオロと動きまわるだけだったという。苦痛を言葉で表すことも出来ない病児は、ただ泣きわめきながら死んでいった。待ち望んでやっと授かった男児をわずか二歳で失った父は、数日間口もきかぬほど落胆し、仕事もいっこうにはかどらなかつたという。

孝則の生まれた年の十二月に開戦となった太平洋戦争は日に日に激しさを増し、世間があただしくなっていくに従って、父の悲しみは徐々に薄らいでいった。そして父の憂心を慰めるように三女洋子が生まれた。十九年にはまたも女兒が生まれた。順子である。この頃、父はとうに男児はあきらめて、次々に生まれてくる女兒を精一杯可愛がった。

父はこの頃すでに桐箱の業を捨て、電気バリカン製造の研究に着手していた。太平洋戦争の戦局は日本にとって日々と悪化していき、日本の主要都市は連日のように空襲をうけるようになった。長女の啓子は大竹の母の里に疎開し、外祖母に育てられていた。

父母と三人の子は広島に残り、リアカーに家財道具を積んで連夜、井ノ口の疎開先に通った。往復は空襲の途絶える夜に限られ、リアカーの前は父が引き、母があと押しをした。時にはまだ六歳に満たない淳子が気丈にも一緒に後を押したり、乳飲み児の順子を背負ったりしたという。幼い淳子が母を助けて真夜中にリアカーのあと押しをする姿に、母は言葉にならないいじらしさを感じたという。リアカーを押す淳子が眠気のみならず、押しながらコックリ、コックリ居眠りをした話は今も家族の語り草になっている。



日本は敗れた。原子爆弾によって一瞬のうちに灰となった市内を逃れて、一家は井ノ口の疎開先に移った。

のちに私はこの井ノ口の疎開地のあたりを父と歩いたことがある。父は十数年前と変わらない地形を懐かしそうに眺めながら、狭いあぜ道を歩いた。着のみ

着のまま家財道具を抱えて右往左往したこの狭いあぜ道で、いま自分は安定した生活と幸福の自信に満ちてたはずんでいる。戦後生まれた息子は、昔の父の苦勞など知る由もない顔をして、田んぼの草を摘んでいる。戦争というものも、生きる苦しみというものもまるで知らない息子は、自分に見守られながら無邪気に畑のなかで戯れている。苦しい思い出の場所に立って、静かに過ぎ去った昔を反芻している自分にくらべ、息子はなんと活潑な明るさにあふれていることだろう。

父はあの井ノ口へ私を伴って訪れて、このようなことを思ったかもしれない。大きく年も離れた、太った父親とやせた息子は夕暮れのあぜ道をそれぞれ違った感慨をもってあたりを眺めながら歩いた。あののどかな情景が私の脳裏に一幅の絵のように残っている。思い出すたびにそこはかとない笑みをもたらず一幅の絵。風が吹くたびにざわめく麦畑の青が印象に残っているから、あれは夏も初めの頃だったのだろう。

井ノ口の疎開地には一週間とないで、一家は全員大竹の母の里に移り、父はそこから仕事場のある広島へ通うようになった。当初父は母の里に移ることに頑なに反対し、母に説得されてしぶしぶ従ったという。妻の里方に頼るということは、一途な男気の父には耐えられないことだったのではなからうか。

敗戦直後の混乱した世では父の仕事は思うように進まず、わずかな収入ではこれだけの所帯を養うには少なすぎた。田舎のことで周りのものは比較的恵まれた生活を送っているのに、一家は麦や芋ばかりの薄いおかゆを食べたり、路傍の草を食べて空腹をごまかしていた。祭礼に町内の世話役が寄付を募って家々をまわる時も、この家の前だけは素通りしていったという。家族は次々と栄養失調に陥り、食べ盛りの子供たちは一日中空腹を訴えて泣いていた。

### (中略)

生と死との皮肉な繰り返しが続いた我が家も、終戦後広島に戻ってやっと落ち着きを取り戻した。戦時下で資材の調達に難儀を極めた、父の電気バリカン製造事業も軌道に乗り始めた。

昭和二三年十二月、男児が誕生した。私である。男児の出生に絶望していた父は狂喜し、縁者の間をふれまわったという。

太閤秀吉は誕生したばかりの我が子、秀頼を一度城内に捨て、それを家臣に拾わせてきたという。拾い子は丈夫に育つという。人間の胎内から生まれ出たものでなく、拾い子は神仏の子という迷信がある。神仏は自分の子だからむやみに死なせたりはしない。父はただ丈夫に育ってくれ、と念じながら秀吉と同じことを試みたという。長男孝則を二歳で失って六年目のことである。

虚弱ながらもどうにか私は成長し、小学校に通い始めると、父はどこへ行く

にも私を伴い、学校の授業の最中でも見境なく教室の扉をガラリと開けた。風呂には無理やり私を誘い、寝る時はいつも私の手をかたく握りしめて寝た。野球のグラブのように大きく、乾いた父の手の感触は今でもふとよみがえってくることもある。布団のなかで私が寝返りをうとうととしても、眠っているはずの父の手は容易に私を離さなかった。無邪気に眠る父の寝顔は、いつも目覚めてもいつも私の眼前にあった。

父と私だけの貴重な思い出を続けよう。

いつだったか、父と私は父の知人の葬儀に参列し、私と父を乗せた自動車は棺を納めた霊柩車の後を追って火葬場に向かった。親族との最後の告別を終えた白木の棺は、辺りの静寂を破る金属性の音とともに火葬場のカマドに消えた。「ガシャーン」というカマドの扉の閉じる音は、まさにこの世からの隔絶の音であった。あの音。凶音に接するたびに私の胸に甦ってくる、冷酷で厳しいあの音。

火葬場の様子を目を食い入るように見つめている私に、父は放心したようにこう言った。

「賢くん、あのカマドのなかに入ったら、もう何もかも終わりで。人間、一生のうち必ずあのなかに入らにゃならんじゃが……」

私はこの時ほど生の危うさにおびえたことはない。生は死の影をはらんだまま浮動し、死は生に仮の宿を貸しているに過ぎないのだ、と。今となって考えれば、私はこの時初めて直感的に生の認識に触れたように思う。

知人に最後の別れを告げ、人生の無常をひとりごとのように嘯みしめた父自身が、それから五年も経ないうちに自ら生との隔絶の扉に消えていこうとは夢にも思わなかったろう。

後年、父と二人で死者を送ったと同じ場所で、今度は私ひとりぼっちで父のなきがらをそのなかに見送ったのだ。



(中略)

「わしは食べることが道楽じゃ」と自らよく放言していたように、父は何よりも美食を好んだ。一度に食べる量も、十九貫という巨体を支えるに余りあるほどの量だった。酒も弱かった父にとって、三度の美食多食は大きな楽しみだったろう。しかしそれは胃腸を損ねる原因になった。食卓を前にすると節することを忘れてしまう父は、たびたび慢性的な胃腸の不調を訴えた。父の引き出しには何種類もの胃腸薬が入っていて、家族には内緒でこっそりそれを飲んでいったようだった。薬で不快をごまかし、食事時にはそのことは忘れたように青年のような食欲をみせるのである。父は世態人情の奥底を見通すような性向をもっていた反面、時々このような子供じみたあどけなさをのぞかせることがあった。

父が死ぬまで使っていた机の引き出しには、あらゆるガラクタの類がつまっていた。ペン先を研磨する小さな石のやすり。易者が使うような大きな天眼鏡。数本の胴の太い金ペン。小学校の修学旅行で私が父への土産に求めてきたキセル。いまそれらを手にとってみると、何ひとつ思い出の種のないものはない。細々としたそれらの一つ一つに父の面影が宿っているように思える。

昭和三五年初春。父は医師から胃潰瘍と診断され、数日のち入院した。自分の体に絶対の自信を持っていた父はあまりの事態にとまどい、母の説得にもなかなか入院を承諾しなかった。入院の直後、胃噴門部の除去手術を受け、しばらくは小康を保った。父の本当の病名は胃癌であったが、これを知るものは家族のわずかに限られた。家族は会話のなかで「癌」という言葉を意識的に避け、父の病気については自分自身さえ偽ろうとしていた。

退院した父の頬は窪み、顔色は土のようで、以前の滌刺とした面影は全く失われていた。

病床にあつては苦しみをこまかすように大声で母を呼んだり、見舞客に笑顔を見せて高談放語してはいたが、やはり虚ろな弱々しさは隠せなかった。

体具合の良い時は「千鳥」の謡を口ずさんだり、庭を歩いたりしていたが、病状がはかばかしくない時はベッドに横たわり、じつと庭を見つめて何事か考えていた。私が学校から帰って父の部屋をのぞいて声をかけると、父は短い返事を返すだけで、再び眼を庭に戻した。

(中略)

昭和三五年十月、福島県の知人から一箱の梨が送られ、父はこのような礼状を書き送っている。

「……最近、鳥取県産出の二十世紀梨が出回りだしたので、西瓜が無くなると

同時に三度三度の食事に二十世紀梨を食べております。極端に申しますと小生は、三月以来、今日まで西瓜と梨で命をつないできたような気持ちです。本日、貴殿より沢山の小生の最も好物であり、かつまた命の綱でもある梨を送っていただきまして何より嬉しうございます。

十月六日で手術後七ヶ月目になりますが、その間梅雨と夏の最も暑い七月二十日頃から八月下旬までの気候には堪えられないほどの苦しみでした。手術部が痛むのです。とにかくこの年齢になって今まで経験しなかった病気の苦しみを毎日毎日経験しております……」

秋も半ばを過ぎても父の病状ははかばかしくなく、一進一退を続けていた。病床の父を慰めるために私が松虫や鈴虫を買ってくる、父は虫籠のなかから放してやるように命じ、庭のいたるところで鳴く虫の音色に耳を澄ませていた。人間がいくらか愛がつてやっても、狭い虫籠のなかでは虫は思存分羽を広げられないからだという。虫にとっては土の上、草のなかにいることが一番幸せなのだ、私に教えたことがあった。虫は籠に拘束され、自分は病氣につながれている。自由を奪われたものの無念さを、それとなく私に伝えたかったのかも知れない。

(中略)

病床にあっても父は体力の許す限りペンを持ち、仕事や私的な手紙を書き続けた。死の十日ほど前までも手紙を書き続け、最後の手紙などは文字が便箋の線上を大きく外れ、字体は統一を失っている。おそらく、あえぎながら、あえぎながらペンを進ませたのだろう。

秋の終りには名前の寅一を「虎一」に改めた。これについて次のような書簡を知人に宛てて書き送っている。

「……先般貴殿よりお尋ねの私の名「虎」につきましては、元の寅一は同じようにても弱いトラで、もうあの寅は終着駅へ来てしまったので、今度は元気なトラ、即ち「虎」に改名して余生を元気に過ごしたいという意味で改名した次第です……」

改名による福音は父のもとへ訪れず、とうとう父は昭和三六年の正月を病床で迎えた。

父が再び入院したのはまだしめ飾りも残っている頃だった。癌の毒素が急激に父の体を侵し始めたのである。診察室から病床へ戻る途中、父は茶褐色の茶がらのようなものを吐いた。食道から胃への道が水も通さないほどにまで閉ざされていたのである。屍血のような汚物を戻した父は、這うように病室のベッドに戻った。

二度目の手術は脾臓と胃のすべてを摘出するという大手術だった。体は極度に衰弱しており、手術中に絶命する可能性も医師から伝えられていた。

手術の前の病院の奥深いざわめきと、手術中の恐ろしいほどの静けさは忘れることが出来ない。次々に駆けつけてくる親類や知人は無言で待合室に腰かけ、ある者はうつむいたまま、ある者は手術室の赤ランプを見上げたまま。心臓の鼓動は脳に響き、心の内に滞るものは次第に大きくなっていった。時計は刻々と時を刻み、待合室にあるものにとって一分は一時間の長さに見える。

(中略)

六月に入って父の病状は急激に悪化した。ある程度予期されてはいたが、こんなにも早くその時が訪れようとは誰も予測していなかった。六月二日早朝には危篤状態に陥り、知人が次々と駆けつけてきた。京都の大学にいた姉は急きよ帰広した

父の脈は途絶えんばかりに弱くなっても、父の精神力は生命を維持した。

「きようは本能寺で織田信長が討たれた日じゃのお」

とつぶやいて、信長が愛護したという謡曲「敦盛」を口にするほどの余裕をみせた。

人間五十年 化転のうちをくらぶれば 夢まぼろしのごとくなり  
ひとたび生をうけ 滅せぬもののあるべきか

二日夕刻、死を直前にした病人とは思えないほど確かな口調で、「人の世の無常、健康の大切、無欲で謙虚な人生の必要」を枕辺の家族や親族に説いて聞かせた。

当時まだ中学に入ったばかりの私については、最後まで、息絶えだえに、

「賢司をたのむ。賢司をたのむで」と言い残している。

昭和三六年六月三日未明。父は五九歳でこの世を去った。臨終は平穩であった。

内部を侵された蠟燭が、風が吹くでもなくおのずから灯を消したような静かさだった。

父の生涯は私にとって一瞬の花のようなものだった。私の前にわずか十二年の生命をさらし、花は夢のような印象を残しただけで散っていった。「惜しまれて散るは桜の誉れ」という父の臨終の言葉が万感の重みをもって私の胸に去来する。いや、幼い私はあの時、生命を惜しむことさえ知らなかったのではなからうか。散る時を待つ満開のわずかな間にだけ、私は無邪気に接したのかも知れない。

まだまだ父については書き残されたことが沢山あるように思う。父の知友縁者をたずねて、父の細かな像を作りあげることが容易なことかもしれない。しかしそうして出来あがった父の肖像に、私は隔たりのようなものを感じずにはいられない。自分の地肌を表面に露わにすることはほとんど稀であった父を、私自身が自ら垣間見た眼で書いてみたかった。父と私とは血のみでなく、過去の夢のような生活の折々でもしっかりと結びついていたという、自分への証しのためにもそうしたかった。父との思い出は私にとって過去への道標であり、未来への唯一の心のよりどころでもある。意識的に、あるいは無意識に私に授けた父の命がけの教訓を、これからも私のなかで育てていきたい。それが私の父に対する義務のようにも思える。

父は私に数枚の思い出の花びらを残して死んでいった。  
そして今年、もう七回忌を迎える。

未完

昭和四二年 夏



挿絵・デッサン

仏原和義